フェンシングにおける大学卒業後の競技継続に関する研究
Research for Sporting Succession of Fencing After Graduation from University.

1K10C139-1　北川　隆之介
主査 間野義之 先生　　副査 木村和彦 先生

【研究背景】

2008年北京オリンピックと2012年ロンドンオリンピックで2大会連続でのメダル獲得という歴史的快挙を果たし、日本フェンシング界は大いに盛り上がった。日本フェンシング界初となるメダル獲得をした北京オリンピックから6年が経過した現在では、国民全体のフェンシング競技の知名度は飛躍的に上がり、2016年リオデジャネイロオリンピック、2020年東京オリンピックでは更なる活躍が期待されている。明るい話題の多い日本フェンシング界だが、マイナースポーツからの脱却をした訳ではなく、競技を続ける環境、競技引退後のセカンドキャリア等取り巻く環境は多くの問題を抱えているのが現状である。その多くの問題から大学運動部所属の世界選手権代表選手やユニバーシアード代表選手等多くの一流選手が大学卒業と同時に競技を引退してしまう。様々なレベルの選手が混在する大学運動部の中で、有望選手たちを引退させないことが、日本フェンシングの競技力向上に繋がるのではないかと考えた。競技生活でのターニングポイントである、大学卒業期にフォーカスし競技レベルによってキャリア意識や競技との関わり方、競技継続意識に対しての差異はあるのか等のフェンシング競技の現状を明らかにしたいと考えた。

【研究目的】

日本フェンシング協会の強化本部を中心に様々な強化政策、育成政策を実施し競技力向上を図っているが、多くの有望選手がいる大学でのフェンシング競技者は大学卒業と同時に辞めてしまう。そこで、引退させないために大学運動部所属の選手たちのキャリア意識や卒業後の競技への関わり方、現状の問題点、優位点を明らかにすることを目的とする。

【研究方法】

関東学生フェンシング連盟 10 大学と関西学生フェンシング連盟5大学の3年生及び4年生を対象に質問紙によるアンケート調査を実施する。大学生フェンシング競技者のキャリア意識や卒業後の競技との関わり方、実態、現状を明らかにする。アンケート用紙の回答から得られた結果はSPSS、Microsoft Office Excelにて分析した。

【結果】

約半数の選手が大学卒業と同時に競技から引退してしまうことが明らかになった。その中で現在の競技レベルが高い選手ほど卒業後の進路で悩む傾向にあるということと、大学卒業と同時に引退してしまう現状を問題視しているという結果が出た。さらに金銭的補助があれば競技を続けたいという選手も競技レベルの高い選手ほど思っており、辞めてしまう最大の要因は金銭面での問題であることが分かった。大学間で差異はあるものの、監督やコーチ等の指導者が卒業後の進路にあまり関与していないという現状も明らかになった。

【考察】

フェンシング競技において現在の競技レベルが高い選手ほど進路で悩むことが多いという点は、卒業後競技を「続ける」「続けない」かの選択を強いられる時期が必ず来るからだと推測できる。悩む要因としてはプロチームの少なさや将来への不安、金銭面での不安が挙げられる。また、「続ける」ことを選択しても自らスポンサーを探し、環境を模索しなくてはならないことからこのような結果が出たと推測できる。ナショナルチームレベルで続けたいと回答している選手は全体の 9.6%いるが金銭的不安、引退後のサポートを不安視しておりそこが課題として挙げられ、競技に悪影響を与えてしまっていると考えられる。金銭的補助があれば卒業後も続けたいと回答した選手は競技レベルが高くなるにつれて上がっていることも明らかになり、高いレベルの選手を辞めさせずに日本の競技力を底上げするのには金銭的補助が必要であると考えられる。

【結論】

大学運動部に所属しているフェンシング選手キャリア意識は高い意識をもっている選手が多い。特に現在の競技レベルの高い選手ほどキャリア意識や競技継続意識が高く、現在の日本フェンシングの環境を問題に感じていると言える。有望な選手が大学以降も競技を継続させるためには、金銭的な問題を解決しなければならないと言える。マイナー競技が故に難しいところではあるが、大学間と日本フェンシング協会間でのキャリアに対しての連携が必要であると言えよう。